創立60周年記念号によせて

本学の前身小樽高商が創設されたのは1911年のことであるから，通算すれば，本年をもって60周年を迎えることになった。教育機関として60年間に果した役割は，その時々の時代的背景や歴史的情況によって影響を受け，一筋の道を歩んできたとは必ずしも言いがたいようである。その間，高名な学者が本学に在職し，学界で指導的役割を演じたことも厳然たる事実である。しかし，研究機関としてみた場合，本学が全体として維持し得た学問的水準がどの程度であったか，にわかに速断しがたい事情にある。また，ある体系を志向した本学の学問的伝統が何であったかを，正確に把握することは，一層困難であると言うのほかはない。だが，本学の気風として，学問への情熱が60年の歴史を通じて脈々として波打ってきた，ということだけは否定しがたい事実だと信じている。この土壌の上に，色々な種が芽生え，色とりどりの花が蕾を持ち，或いは開花しつつあると言うのが，むしろ，本学の現状を表現するにふさわしいものと言えよう。全貌とは言いえないが，その成果を示したものが，60周年を記念して計画されたこの記念論文集である。この論文集が，学界にどのような寄与をなすことができるかは，私がみずから言うべき事柄ではない。しかし，学問的業績の一定基準による審査に合格して，本年から本学に大学院が開設されることになったのは，おのずから一つの尺度が示されたものではなかろうか，と言うことだけは付言しておきたい。それはともかく，私は，大学院の開設とこの論文集とが，一段と高い水準への稔り豊かな跳躍台となることを祈っている。

私は，60周年記念式典の式辞の一部で，つぎの趣旨を強調した。——学問の道は遠くして峻しい。大学には厳しい学問がなければならない。この学問について，ギリシャの先哲は，「人間への愛のあるところに，学術への愛もある」（ヒポクラテス）と言っている。学問にかかわるあらゆる営為の目的ないしは原点は，人間の尊厳性の尊重・確立と，人類の福祉・平和の増進・

確保と言うことであり，そのために，真実を探求し・分析し・これを伝えることが，大学（学問）本来の機能となるのである。この機能の実現のためには，「真理性への勇気」（ヘーゲル）が充満していなければならない。——

私が式辞で強調したこの点には，若干の注解が必要である。それは，「……のために」という言葉で示されるように，ある原点に基づく価値体系（世界観・世界像）を背後に置き，あるいはそれとの緊張関係を持たせながら，世界や対象をその歴史性において捉え，学問の全体像を踏まえて，専門分科の探求・分析をしなければならない，という立場の強調である。そこで問題となるのは，近代科学一般の基本的要請として主張せられる学問（とくに社会科学的認識）の客観性ということとの関連である。そこでは，価値（世界観）を排除した世界が客観的世界であり，価値を排除したものが客観性である，という具合に理解されているようである。マックス・ウエーバーが強調した価値（世界観）に対する強度の禁欲性・没価値性論が，学問的思考に大きな影響力を持っていることは，言うまでもあるまい。もちろん，私も，方法の客観性の重要性は認める。しかし，現代の学問・科学には，その客観性を強調するあまり，実は，方法的な客観性の中だけに安住し，それのみにたよって，細分化されたある専門分科の体系を築きあげ，それを自己完結的に考える傾向が強くみられる，と言ったら言いすぎになるだろうか。そこに，人間不在の学問が生まれ，学問が没歴史性に陥って体制の従僕とされる，と言う危険性の生まれる根源があるのではなかろうか，と思われてならない。ある専門分科の学問像は，その背後にある世界像から，価値関係的に照射・衝撃されることによってこそ，さらに高次の生命が与えられるのではなかろうか。ウエーバーでも，ある理論や政策と，その背後にある価値体系との対照関連を分析することが，重要な学問的課題であることを否定してはいない。端的に言えば，体制や機構の中に埋没した人間価値を再発掘し，救い出すことこそが，現代に課せられた学問的課題の中心ではないか，とさえ考えている。

私は，創立60周年記念論文集の刊行を心から喜ぶとともに，学問・科学

の極度の多様化・専門的分化に関連して，最近痛感していることの一端を記し，ささやかな序文にしたいと思う。

なお，この記念号刊行のために，社団法人緑丘会から多額の資金援助を受けた。記して謝意を表したい。

1971 年 8 月 30 日

小樽商科大学長　　実　方　正　雄